

Niigata Association of
Nursing Care Research

ニュースレター

第4号

テーマ ヒューマンケアを支えるチーム連携

第 3 回学術集会を終えて

学術集会長 佐藤 富貴子

東日本大震災、また各地で発生した自然災害において被災された皆様には心よりお見舞い申し上げます。また、一日も早い復興を心よりお祈り致します。

第 3 回学術集会は平成 23 年 10 月 22 日 (土) に、226 名の参加をいただき開催することができました。会員の皆様のご協力・ご支援の賜物であり、心より感謝申し上げます。また、開催に当たり、新潟市保健衛生部長野本信雄様、新潟県看護協会長佐藤たづ子様にご来臨いただき、本学術集会そして看護職へ期待を込めた心強いメッセージをご祝辞として頂きましたこと、厚く御礼申し上げます。

今回の学術集会のメインテーマは「ヒューマンケアを支えるチーム連携」としました。医療の高度化が加速度的に進んでいる今日においても、尚、一人一人の患者さまに心を寄せ、個々の力を引き出すヒューマンケアは看護の原点です。そして職種・職域を超えたチーム活動の重要性は誰もが実感し、その効果的な展開を社会は期待しています。

今回の一般演題の発表は 24 題ありました。いずれもメインテーマに相応しい内容であり、発表後の質疑においても、実践知が飛び交うような意見交換

が持たれました。また、「ヒューマンケアを支える人の輪と和」をテーマにしたシンポジウムでも、それぞれ、シンポジストが看護師またMSWの立場からご発言の後、地域の看護職の交流の場に相応しい活発な意見交換・情報交換がもたれました。本学術集会の設立趣旨でもある「看護専門職として、臨地および教育研究の場における実践知のコラボレーション」の場として、積極的な参加をいただいたと感謝申し上げます。

第 3 回学術集会は大勢の会員、またボランティアの方々からのご協力・支援を頂きながら、無事に成功裡のうちに終えることができましたこと、皆様に感謝申し上げます。また今後も新潟看護ケア研究会にご支援賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

特別講演

ヒューマンケアを支えるチーム連携

—生活予後診断に基づく実践と研究成果—

講師 紙屋克子先生

座長の立場から

新潟大学医歯学総合病院 佐藤 富貴子

特別講演の講師には、まさにこのヒューマンケアを科学的に実証しながら展開してきた紙屋克子先生をお迎えすることができました。演題は、「ヒューマンケアを支えるチーム連携—生活予後診断に基づく実践と研究成果」であり、紙屋先生の熱い思いを感じながら予定の 1 時間 30 分があつという間に過ぎてしまいました。講演では、意識障害患者看護の出発点と最近の看護の情勢から始まり、遷延性意識障害者の現状、そして看護プログラムの開発と実践、また現医療制度の問題と課題と進みました。終始、熱く熱く語られ、また時々かざす‘手’がとても大きく実践家としての‘技’が背景に見えました。



第 4 回学術集会 再発見! 看護の力

日時：平成 24 年 10 月 20 日 (土)

会場：新潟大学医学部保健学科

学術集会長：中村 悦子

(新潟青陵大学看護福祉心理学部看護学科 教授)

特別講演：在宅ケアのつながる力

—「暮らしの保健室」開設で見えてきたこと—

秋山 正子 (白十字訪問看護ステーション 所長)

シンポジウム：私たちが発揮している看護の力

一般演題募集：平成 24 年 6 月 4 日 (月) ~ 6 月 18 日 (月)

紙屋先生は、臨床看護の第一義の役割は療養生活への専門的な援助を通して患者の健康回復過程に貢献することであり、意識障害患者においてはコミュニケーション・食事・排泄・移動などの日常生活行動獲得の過程を通して、生活に質的变化をもたらすことができると語られました。現に起こした変化の実際を見せていただきながら、どんな変化を起こすことができるかを常に生活支援者の視点で考え実践していくこと、そして、その変化を見逃さない感性を持ち続けることの重要性を実感しました。

また、意識障害看護の基本は、脳の学習性・可塑性・代償性に期待し、患者の状態に適した刺激を提供することで学習効果を高め、生活行動を再獲得させることにあるとしています。講演でもその実践と成果を科学的根拠とともにお示しいただきました。

先生の確信に満ちた意欲に感激すると同時に、看護の力による意識障害患者のQOLの向上を目指した取り組みや成果を広く社会に見せ、発信してきた先生の功績の大きさを改めて感じ、これは次に続く看護職へのエールだという思いをもちました。

紙屋先生は自分を超えてほしいと、自分がやってきたことを広く看護職に伝え、その先に進んでほしいと話されました。後輩の看護職はその言葉を真摯に受け止め、努力する義務があると思います。

講演を聞いた参加者からの感想をいくつか紹介させていただきます。「看護ってすごいと改めて感じた」「結果を客観的に可視化することの必要性を学んだ」「日々の看護を諦めずに取り組むことの大切さを再認識できた」「元気をもらった」「看護がまた好きになった」等。看護の力を感じ、また勇気をいただいた貴重な時間でした。

シンポジウム ヒューマンケアを支える人の輪と和

座長の立場から

新潟大学医学部保健学科 渡邊タミ子

チーム医療・福祉として連携を図り協働し、必要なサービスを提供することが期待されているが、現実的には多くの困難を伴うことが多い。その理想と現実の狭間で臨床の場において、どの様に課題視し、その改善に向けてどの様に工夫しているのかを、シンポジウムを通じて、より良質な医療・福祉サービスの実現を図るための契機にしたいと企画した。

3人のシンポジストとして、山間部で「出向く医療」を掲げ、情報交換の円滑化を推進して活躍している看護師の立場、次ぎに新潟市街地に近い病院で地域の診療所と連携強化を図り、‘顔の見える関係づくり’を最大の武器として活躍しているMSWの立場、そして精神医療において‘その人が暮らす生活の場’を重視し、直接話し合える「場づくり」を大切に退院支援で活躍している看護師の立場、の3人をお招きして、各取り組みの実態と課題についてご講演いただき、参加者の方々との活発な意見交換が行われた。

最後に、ヒューマンケアを支える人の輪と和で重視すべき視点として、患者様の生活拠点となる地域を基盤にして、‘顔の見える関係づくり’と‘話し合える場づくり’が提言された。これは、チーム医療の円滑化を図るうえで‘要’になるとの有用な示唆を得ることができた。そのシンポジストの方々によるご講演の要旨もしくはご感想について、ここにその一部をご紹介します。

シームレスケア実現に向けた地域連携室看護師の役割

新潟県病院局業務課 長谷川美津枝

阿賀町は人口約13000人(H23.6現在)、高齢化率が41.8%と粟島浦村に次いで県内2番目に高い地域である。県立津川病院は町内唯一の入院施設であり、ベッド数54床、一次救急をこなしながら、町立診療所や訪問看護ステーションと協力し、相互の役割分担や業務量を考慮してバランスを保っている。診療所をベースとした地域医療を支えながら救急医療と入院医療を担い、訪問診療(=出向く医療)は互いの業務量をみながら実施している。現在、町内の在宅患者約200人を安定期・不安定期別、地域別(効率よく巡回するために区域別に担当)に担当しているが、互いが連携するための情報交換のツールとして、「連携ファイル」「健康ファイル」と呼んでいる連絡記録を用いている。

当院の在宅医療の方針は、「診療所の患者も津川病院の患者である」「訪問患者の入院は断らない」であり、異動がある県立病院において、職員一人一人がこの方針を理解することが必要である。地域連携に対する病院の体制は、病棟部門に地域連携を置き、MSW1名、退院調整看護師1名、訪問看護師3名を専従配置としている。

地域完結型のシームレスケアの充実を掲げながらも、進みゆく高齢社会、各施設の役割機能の限界、マンパワーが追いつかない現状があり、看護の課題も多岐に渡る。また後期高齢者は、急性増悪により再入院するリスクが高く、病状の悪化に対する老老介護者の不安が大きい。退院後、次回訪問日まで間が空いた事例を体験し、病院を出た瞬間から次に訪問するまでの「隙間」を「繋ぐ」ため、退院調整看

看護師が電話で状態確認を開始した。現在も試行錯誤を繰り返しながらシームレスケアの充実を図っている最中である。

地域医療や連携で大切なことは、①集める医療（＝病院内医療）と出向く医療のバランスを考えると、②施設枠だけでなく地域枠で医療を考えると、③顔の見える心地よい連携を心がけることであると実感している。

地域における連携コーディネーターの役割

恩賜財団済生会新潟第二病院MSW 齋川克之

当院は、平成 12 年に 3 医師会と協定を結び、昭和 62 年からのセミオープンシステムから、登録医・病院医師とが共同で診療にあたるオープンシステムへと移行した。また、平成 13 年開放型病院認可、そして平成 14 年 8 月、全国 43 番目（新潟県初、全国済生会病院初）となる地域医療支援病院に承認された。当院の中長期目標には、地域医療支援病院としての役割が大きく謳われる。その病院の目標実現のため、地域医療連携室（以下、連携室）は BSC を用い、部署のアクションプランを作成し実行する。連携室では、①患者主体の医療連携、②地域における医療連携の円滑な運営のために院内外で医療連携をコーディネートすること、③スムーズな双方向の医療連携の実現、以上の項目が最大のミッションとなる。現在、連携室のスタッフは、看護師 1 人、ソーシャルワーカー 3 人・事務員 1 人の計 5 人体制である。3 人のソーシャルワーカー配置は、患者への間接援助機能の意味合いを深く込めた配置となっており、前方連携に特化したソーシャルワーカーを配置することで、外来・入院の入口における振り分け機能を発揮している。具体的には、ソーシャルワーカーが早期に関与することにより、処遇困難ケースの早期発

見から医療相談室へのケース依頼・迅速な対応が可能となっている。また、セカンドオピニオン相談窓口として面接などを行い、適切な受診・入院方法の説明など、患者さんが主体的に医療機関にかかれるようにサポート機能を発揮している。そして、ソーシャルワーカーの機動力を生かし、行政・医師会などとの連絡調整や各医療機関の連携実務者とのネットワーク構築、医療連携に関する会議・研修会の企画運営を行うなど、連携体制構築のためソーシャルアクション機能を発揮する。

前述のミッションを果たすべく、連携室では医療連携の円滑な運営のため種々の業務を行う。ここでは、特に人と人とのヒューマンリレーションに焦点を当て、「医療連携ミーティング・研修会の企画と運営」について述べる。これには、医療連携総会や病病連携会議、医療連携研修会などが挙げられる。その中でも病病連携会議は、平成 14 年、急性期病院である当院からのスムーズな転院の必要性から構築した。医療機関相互の医療の役割分担を明確にすることで患者さんが困らないようスムーズな病院間での医療連携の実現を確認しあつた。現在、新潟市近郊の療養型・リハビリ病院などを中心に 14 病院と連携し、患者が必要な時に適切な医療が受けられるよう、ケースを通じて医療における役割分担推進を積極的に行っている。具体的活動としては、日々の連携における事例検討・講演会・情報交換などを、連携実務者部会（医師、看護師、MSW、事務が参加）・看護部会の 2 つの部会で展開し、シームレスな医療連携を実践している。これらの会議・研修会の開催は、地域完結型の医療連携システム構築、またそれを維持・推進するために重要である。企画・開催を通じ、医療連携に関わるさまざまな職種が交流し、医療連携の実践と情報共有化、さらに地域全体での医療連携の推進につながっていく。そして「face to face のコミュニケーション活動」を継続することで登録医・連携医療機関などと良質な信頼関係を保ち、医療連携におけるマネジメント機能を発揮できると考える。



平成 19 年 11 月 17 日、新潟における急性期病院の連携実務者 5 人が世話人となり、連携実務者の会である新潟医療連携実務者ネットワークを設立した。設立目的は「連携実務者相互の理解と交流を深め、医療連携の円滑な運営と質向上を図ること」である。つまり、それぞれの連携室の職員同士が顔の見える連携を行えるようにすることが最大の目的である。連携実務者にとって、人的な社会資源は、連携室業務における最大の武器となる。現在、この会は全県の医療機関の連携実務者が参加する会へと成長を遂げ、県内の二次医療圏を単位とした主要地域ごとの保健・医療・福祉の連携を実践する連携実務者ネットワークの設立をサポートする。

今、医療連携を包括した地域連携のかたちはめまぐるしく変動し、次のステップへ地域連携の形が進化していくことが迫られている。こうした状況の中で、連携室は地域を包括的に捉え、「患者さんが必要な時に適切な医療福祉サービスを受けられる」よう地域連携システムを構築していく役割を担うことが重要である。そして、地域関係機関との信頼に基づいた連携体制の構築と維持、地域全体を見据えたコーディネーターとして機能していくことが望まれる。

ばならない。患者が何を望み、どうして行きたいのかを引き出し、自己決定を尊重した関わりが必要となる。そのために、チームとしてどう協力して支援していくかということが、ヒューマンケアという視点からも大切であると考えている。

□演発表の座長を終えて

新潟大学医学部保健学科 小林恵子

第 3 回学術集会では、テーマ「ヒューマンケアを支えるチーム連携」のもと、7 題の口演発表がありました。発表されたテーマは、「がん」「終末期」「高齢者」等を対象とし、「対象理解」「意思決定への介入」「自立と QOL を高めるケア」から「他職種連携」まで多様ですが、いずれも看護実践の質向上の追求につながる内容であり、大変興味深く聞かせていただきました。

私は 4 月に新潟大学に赴任し初めての参加でしたが、発表および参加された皆様の熱い思いが十分伝わり、また、実践の場で起こっている現実を発表、質疑をとおして、教えていただくことができました。このような発表、交流をとおして、看護職同士が互いの実践知を公表し、活用しあえる機会が広がるとともに、さらに、実践者と研究者がつながり、実践に役立つ理論を導き出す機会となっていくことを期待しています。

ご多忙の中、学術集会を企画、準備いただきました皆様、大変ありがとうございました。



精神科におけるヒューマンケア

医療法人白日会黒川病院 羽田 誠之

2004 年に精神保健医療福祉の改革ビジョンで、「入院治療中心から地域医療中心へ」という方針が提示され、受け入れ条件が整えば退院可能な 72000 床の解消を図るべく、様々な取り組みがなされて来た。当院でも、長期入院患者の地域移行を進める為、多職種による退院支援プロジェクトチーム(以下、退院支援チーム)が発足し、退院後の地域生活を支援する目的で地域生活支援課が設けられた。

その中でチーム医療は、ひとつの中核となるものである。私自身、退院支援チームのリーダー・退院調整看護師として、「チームで考える」「チームで動く」ということを念頭に置き活動している。しかしながら、それぞれの職種が日々多くの業務を抱えている中で多職種と連携して行くことは容易ではない。私自身、チーム医療を円滑に進めていく上での基本として、1. 他部署や同僚の批判をしない。2. 自分や他者の領域をわきまえる。3. 各職種の専門性や考え方の癖を知る。ことが重要であると考えている。その為に、顔の見える関係作りを大切にし、出来る限り直接話し合える場を設定して相互理解を深めてきた。

ただ忘れてはならないのは、誰のための支援かということであり、その中心には常に患者がいなければ

示説発表の進行を終えて

新潟県立津川病院 佐々木美奈子

示説会場では、A 群 B 群合わせて 16 題の報告がありました。多岐に亘るテーマにあらためて、看護はさまざまなことに関わることを実感しました。社会の変化は目まぐるしく変化し、急加速している超高齢者社会に向けて看護職への期待は増すばかりです。その意味では、このように多岐にわたる臨床現場の看護問題を研究的視点で捉え、日々の業務に流されることなく立ち止り、一歩踏み込んで自らのケアを

まとめていく過程は素晴らしいものと思います。示説のメリットは、研究者と参加者が一体となって意見交換をタイムリーにできることにあります。進行役をさせていただいて少し残念に感じたのは、参加者からの発言が少なかったことでした。しかし、質疑応答の時間を終えてから研究者のもとへ其々たくさんの方が集まり会話する姿を見て安心し、自らの進行下手を反省しました。越後人特有の奥ゆかしさは、このような公式の場でも見え隠れしていました。臨床と学問を繋ぐ空間で越後らしさは続くのか、次年度が楽しみです。



第 3 回学術集会(平成 23 年) アンケート結果

学術集会参加者は 226 人(前年度 180 人)、アンケート回答者 142 人、回収率 62.8%(前年度 43.3%)であった。参加者数、アンケート回収率ともに増加しており、本学会への関心が高まりつつあるといえる。プログラム全体、特別講演、シンポジウム、演題発表については、概ね良好な結果であった。

全体の感想としては、「毎年、この学会に参加すると気持ちが前向きになる」「普段思っていることが、具体的に上げられており、納得できる内容である」「看護の役割についての理解が深まり、新しい学びがあった」「地元で活気ある学会が開催されてうれしい」等の感想が寄せられた。

プログラム全体については、「特別講演、シンポジウム、研究発表を 1 日で行うには時間的に無理がある」「内容が多すぎる」等の意見があった。

特別講演については、「看護師の手でできることがわかり、やりがいがある仕事だと改めて思った」「看護の介入で患者の変化をおこしていくことを改めて考えた」等の多くの感想が述べられた。

シンポジウムについては、「発表の内容がわかりやすく、実際に行なっていることがわかった」「日々の実践によい刺激を受けた」等の感想があった。一方、「少し時間が長い、一般演題にもう少し時間をとるとよい」という意見があった。

質問項目	とてもよい	よい	より工夫が必要	不参加	記載無
プログラム全体	36 (25.4%)	94 (66.2%)	3 (2.1%)		9 (6.3%)
シンポジウム	38 (26.8%)	71 (50.0%)	3 (2.1%)	11 (7.7%)	19 (13.4%)
特別講演	89 (62.7%)	46 (32.4%)	0 (0%)	2 (1.4%)	5 (3.5%)
口演発表	33 (23.2%)	87 (61.3%)	6 (4.2%)	6 (4.2%)	10 (7.0%)
示説発表	18 (12.7%)	60 (42.3%)	15 (10.6%)	32 (22.5%)	17 (12.0%)
広報活動	12 (8.5%)	81 (57.0%)	19 (13.4%)		30 (21.1%)

(全回答者数 142)

演題発表については、「示説と口演の両方に参加できるように調整してほしい」「演題発表にもっと時間をとってほしい」等と演題の内容に関心の高いことがわかった。

演題の内容については、「一般演題の査読審査を充分に行ってほしい」「研究方法の指導が必要である」等の意見があった。

広報活動については、「よい内容なので、もっとアピールしたほうがよい」「知らない人が多いのではないか」「ホームページのアップが少な過ぎる」「病院や看護学校に広く広報してほしい」等の意見があった。

当日の運営については、受付の対応や会場の環境について、改善が必要であるという意見があった。受付については、「手続きが完了しているという葉書等があるとよい」「案内の内容が違うので困る」「会場使用などの細かいオリエンテーションがあるとよい」等の意見があった。

平成 23 年度から行われた「抄録作成方法の指導」については、感謝の内容が寄せられた。来年度「ぜひ利用したい」が 14 人、「必要に応じて利用したい」が 49 人であった。

参加費については、「高い」という意見が毎年出される。一方、今回の参加者の中には、「内容で納得した」という意見もあった。

最後に、参加者の職種については、看護師が中心であり、保健師、助産師、関係職種の参加が少ないという現状である。

〈アンケート結果についての検討内容〉

1. プログラム全体については、現在の段階では、会期を 2 日にすることが経費不足や運営体制の事情で困難であるが、将来的には会期を 2 日にできるように活動を発展させたい。
2. 演題の内容については、本学会は、現場の実践報告と研究の両方を発表できる場として提供する方針である。現場の実践と研究をつないでいき、看護の発展につながることを目指している。
3. 広報については、県内各病院、訪問看護ステーション、保健所、看護学校等に、年 2 回案内を発送していることから、各施設に届いてから各部署への周知が行われていないことが考えられる。今後は、この点への対応が必要である。さらに、広報活動を工夫していきたい。
4. 当日の運営については、受付の対応や会場の環境について具体的な改善策を検討していきたい。
5. 「抄録作成方法の指導」については、平成 24 年も引き続き実施予定である。
6. 参加費については、会員 3,000 円、非会員 4,000 円が「高い」という意見が毎年出される。学会運営に費用がかかることを理解していただく必要がある。また、内容を充実することで納得していただく企画・運営の努力が必要である。学会運営は、学会費・学術集会参加費と会員の活動によって成り立っていることから、今後とも会員皆様のご協力をお願いしたい。
7. 参加者の職種については、保健師、助産師、さらに関係職種に参加を働きかける必要がある。そのためには、プログラムの検討を行なっていく必要がある。

演題応募時の「抄録作成方法」個別指導の実施

平成 24 年度の学会活動の一環（会員への貢献）として、第 4 回学術集会の演題応募時の「抄録作成方法」について、希望者を対象に、学会役員による個別指導を行います。

- 1) 案内の詳細は、第 4 回学術集会の「演題募集要項」と共に送付します。
- 2) 申込受付期間は、平成 24 年 4 月 23 日(月)から 5 月 31 日(木)とします。
- 3) 個別指導の実施期間は、原則として、受付開始から平成 23 年 6 月 14 日(木)までとします。

編集後記

第 3 回学術集会も無事終了し、事務局では第 4 回学術集会の準備を進めています。詳細は下記HPをご覧ください。チーム医療が重視される今日では、

看護職の果たす役割がますます大きく、そして発揮されることが求められています。「ヒューマンケアの輪と和」から皆さん一人ひとりが発揮する「看護の力」の探求へと学会も発展していきます。10 月、また、ご一緒できれば幸いです。ご参加を心よりお待ちしております。

担当：水谷、宮坂、甲田、佐藤

新潟看護ケア研究学会 事務局

〒951-8518 新潟市中央区旭町通 2-746

新潟大学医学部保健学科内 関井研究室

Fax : 025 (227) 2367

Mail : a-sekii@clg.niigata-u.ac.jp

HP: <http://www.clg.niigata-u.ac.jp/>

[~n-nursing-care/](http://www.clg.niigata-u.ac.jp/~n-nursing-care/)